

女性医師の窓

ありがたい訪問カット

轟 千栄子

12年前に亡くなった夫は開業してからずっと診療所から歩いて2分の床屋さんに行っていました。いつも帰ってから困った顔で洗面所の鏡をのぞきこんでいました。時には板前さんのような角刈りもどきにされたり、もみあげの長さが左右違ったり、眉毛が左右対象でなかったり。それでも律儀な夫は「一度お世話になったのだから」と通い続けました。業を煮やした私は「美容院でカットしてもらったら」と当時から通っている金沢の美容室を勧めました。そこは男性のお客さまも多くオーナー夫妻の奥様が私の担当でしたが、「夫もいい仕事するのよ。」と以前に話しておられたので（でもお客さんは圧倒的に奥様の方が多く、時々手持ちぶさたな様子のご主人を鏡越しにお見かけしておりましたが・・・）迷う夫に「きっと素敵になるから」と背中を押して予約の電話をしました。あいにくご主人の予約がいっぱいで支店を任せ週に何度か本店でもお仕事をしているスタイリストのKさんをお願いすることになりました。私は少し残念な気持ちで、2度目からご主人に変更してもらおうかと言ったのですが、例によって「いやKさんをお願いする。」と夫の美容室通いは始まりました。

土曜日の午後のサンダーバードで金沢へ行き、カット。その後片町（たぶん）に飲みに出て深夜にタクシーで帰ってくる。というコースが確立されると、鏡の前で「そろそろ髪ものびてきたなあ。美容室行こうかな。予約してくれる?」「はい、はい。」「予約できたよ。」「ありがとう。」という会話が繰り返されました。いつも人の気持ちを大事に考えて気を遣う人でしたから、仕事を忘れ軽快な会話を楽しんで息抜きができれば嬉しく送り出していたころを懐かしく思い出します。

夫は最後の療養生活を自宅で過ごしました。羽咋病院に入院させていただき、外泊許可をもらって自宅で過ごし、朝の主治医の回診の時間に病室に送りそしてまた自宅に。秋の気配とともに一緒にいられる時間も残り少なくなったことを感じていました。長くカットしていない髪は伸びていつもおしゃれだった夫らしくありませんがもちろん美容室に出かけることはかないません。そんな時です、妹が直接Kさんに連絡してカットに来てくれるようお願いし、Kさんは快諾してくださいました。自分が思いを込めて作った庭をガラス越しに見ながら夫は最後のカットをしてもらいました。すっきりと髪を整えたその1週間後夫は帰らぬ人となりました。羽咋病院で以前一緒に働いた看護師さんたちがみんなできれいにお化粧してくれました。とてもとてもいい男になりました。

夫がカットしてもらったその場所で今は私の母がひと月ごとにKさんにカットしてもらっています。今年86歳と高齢の母は美容室に出かけるのは難しい、でもきれいにしていきたい。そんな思いに応えてお休みの日に来てくれるKさんは仕事をしている方が楽しいと言います。そしてこんなかたちで、きれいにしていきたいけれども出かけることが難しい方々のところに呼ばれれば行きます。将来は高齢者の介護つき集合住宅のようなところに出かけていき、喜んでいただければと考えていると聞いて、きっとそんなニーズはあると女性としていたく共感しました。応援してあげたいと思う冬の日でした。